

新校舎における校風の展開

—ホーム・ルームの指導—

指 導 部

I 附連高校部会（39年度）発表要旨

名大附高は1学年2学級編成、計6学級で、1学級平均53名の小規模な学校であるから、ホーム・ルーム指導がすぐに学校全体の気風に結びつき、校風の問題として取り扱っていきやすい。本校指導部の実践報告が、学校ムードを取り上げている理由の一つはこの点にあり、本年も、新校舎に完全移転した第1年目にあたり、校風の展開を取り扱っている。本校指導部が校風の問題を取り扱ってきて、これで4年目にあたる。

そこで、本校の歩みを簡単にふりかえてみると、昭和25年に高校が創立した当初は、附中と附高は全く別の学校であったが、27年度から中・高共通の校長が任命されるようになり、それにつれて教官の組織も一体化してきたのである。28年から29年にかけては、東三河の豊川から名古屋へ学校が移転して、素朴な田園地帯から実利的な都会へと風土の差も味わってきた。一方、入試方法の移り変わりを見ると、「資料」にあるように多変しているのであり、それにつれて校内の気風も生徒指導の在り方も大きく変化してきた。しかし、ここ数年間は、附中に完全な抽選で入学した生徒がほぼそのまま附高に入学し、中・高の定員差だけの少数の生徒が外部の中学から、進適に抽選を加味した選抜方法で入学するようになっている。

こうした形の中・高一貫6ヶ年教育になっているので、次の問題点を生じている。

1. 高校に入学しても、環境に対する慣れと刺激の少なさから、気まとも無気力とも見られるゆるみが見うけられ、一見自由と受けとられやすい。
2. 生徒の学力差が「資料」のように高校としては大きく、そこから派生する問題も多く、又、各教科、ホーム・ルームなどにおいて一つの問題にじっくり取り組むことがむずかしく、中学生的な扱いに流れやすい。

この問題点に対処して、一方では入試方法の検討、高校の1学級増運動を行っているが、他方、指導部を中心として学校ムード改善の指導を徹底してきている。

その内容を年度毎に簡潔にまとめると

36年度 生徒会活動を中心にして、規律ある学校生活にする。

37年度 まとまりあるホーム・ルームに校風の基盤をもとめる。

38年度 全入制クラブ活動によって、校内に活力をみなぎらせる。

となり、本年は、これらの成果を活用し、新しく校風を展開させるために次のような目標をたてた。

1年 まとまりあるクラスにし、クラスとして学校の諸行事に積極的に参加する。

2年 生徒会活動とホーム・ルームの活動を結びつけ、学校の気風の中心にする。

3年 受験をひかえた各個人の指導の充実と、クラスとして学校行事に積極的に参加する。

以上の目標にしたがい、クラスの生徒の約半数に当たる役員や委員を十分に活躍させるよう指導し、年1回程度の学年別保護者会、年2回程度の個人別保護者面談、そして該当クラスの教科担任とクラス担任との学年末における生徒指導上の会議である学年会議などを、担任中心主義で実施している。全体をまとめる場合は、教官会議、担任の会議、指導部の会議を開いて問題の整理をしている。

そうして整理された、生徒指導上の本年度における留意点を列挙すると次のようになる。

1. 遅刻については、生徒会の生活委員が遅刻者の生徒手帳を取り上げ、担任から注意する。
2. 掃除は担任から徹底させるようにし、下校時には日直教官が清掃状態と下校状態を見まわる。
3. 学校できめた服装をし、附高生としての誇りを失なわない。
4. クラブ、生徒会などに積極的に参加させる。
5. これまで不振の文化系クラブ活動を助長する。

以上の指導経過として、遅刻・掃除などの躰に関する事は、力を入れている割に学年進行に伴って成果が上らず、高校段階におけるこうした面の指導のむずかしさに直面している。生徒の服装・態度は大体良好といえるが、非行傾向を見せるものもいて、指導の対象

になっている。文化系クラブの振興は、文化祭・学園誌の充実という方向で行い、例年以上の成果を上げつつある。又、学習面は補習を一切行わず、高2、3を対象とした年6回の実力テストの成績を利用して、毎年安定した成果を上げている。

これらの状況を、ホーム・ルームに即して報告すると、次のようになる。

高1 A, Bの両クラスは、年間行事計画表の5月の学年別遠足と中間テストまでは、まとまりある学級づくりと担任と生徒の面接などで手一杯であったが、6月のクラス対抗ソフトボール大会を迎えるとA, Bそれぞれの行き方を示すようになり、この大会にはB組が好成績を上げてクラスの雰囲気を高めたのであった。7月のバレーボール大会には、逆に、A組の方がクラスのまとまりを高め、好成績を残したところで1学期を終えた。

8月になると、4泊5日で木曾駒登山を含んだ林間学校に高1全員が参加した。指導上、特に留意した点は平素の学校生活においても注意している、持ち物や服装が華美にわたらないようにすること、時間を厳守することであった。このため遅刻者2名を家に帰したりしたが、結果としては、これから3年間の学校生活に何らかの形でプラスするものがあって考えている。2学期になると、後期の生徒会に1年のホーム・ルームからも役員を出すようになり、生徒会の動きにクラスとして協力していく体制が出来はじめている。

高2はあっては、前期生徒会が対金沢大付高交歓競技会を実施することを最大の仕事として、A, B両クラスがこれをあと押しする形で活動してきた。金沢との交歓会は今年で7回目になり、本校体育系クラブの総決算ともいえるのである。クラブ活動については高1, 2は全入制であり、全体の39%が文化系、61%が体育系に属している。これらのクラブ活動の中心も高2であり、ホーム・ルームにおいてもそうした面の活動が当面する課題であった。その間をぬって、実力テストをきっかけにして進路についての指導も行い始めている。

2学期になって発足する後期生徒会の中心も高2であって、文化祭2日、体育祭1日の実施に全力を上げていた。この間、10月の上旬には高2全員が飛鳥奈良地方の1泊見学旅行を行ない、地味な見学旅行にもかかわらず、見学態度をよいとするもの69%、悪いとするもの3%というまとまりよい旅行をしている。

高3は、受験に関する問題を扱うことが多く、学校行事がある場合には個人的に活躍する者もいるが、クラスとしてのまとまりを高めるまでの働きをするに至らぬ場合が多い。しかし、学園祭の内容を充実しようとする今年の高3の働きかけは、学校生活に新鮮な風

を吹き込んだということができた。新学園歌の制定、討論会の実施、仮装行列の実施、フェイーストームの実施等、校風展開に資する動きが生まれてきた。と同時にクラスとしてのまとまりも高められた。

このようにして、各学年の各クラスがそれぞれの立場から生徒会活動や学校の行事に参加し、全体として校風を高めている様子を概観したのであるが、本校にあっては、そうした校風の基盤がホーム・ルームにあることをあらためて感ずる次第である。そうして、ここに見てきたような過程のすべてが、校風を成り立たせている要素であるということができる。少なくとも、こうした指導過程が本校の特殊状況に対処して、より好ましい学校ムードを生みつつあるということができると思う。

以上、ホーム・ルームと校風の間を今年の実践例を通して述べたが、ここで、「資料」の中から残された問題を1, 2拾ってみたい。

まず、クラス担任とクラスの生徒とのつながりについての調査結果から、生活指導面においては家庭との連絡が必要なこと、個人指導を徹底させるには担任以外の先生との協力が必要でカウンセラー制度の活用も考えていかねばならないといえる。本校では、カウンセラーは十分に活用しているとはいえない。又、父兄との連絡は出校してもらうのを原則としている。尚、担任と生徒の個人的なむすびづきの多さとクラスのまとまりのよさの間に直接の関係はないといえそうである。

次に、ロング・タイムやショート・タイムのホーム・ルームの運営については、調査の結果にもあるように、今のところ調和のとれた指導計画が立てられているといえないところに問題が残っている。

発表者・酒井為久

日 時・39年11月14日(土)

会 場・広島大学附属高校

II 資 料

1. 本校の組織と校舎の変遷について

附中18年、附高15年の歩みを、教官組織と校舎の変遷とに重点を置いてまとめてみる。説明は表1の中の(ア)~(ク)についてである。

- (ア) 昭和22年4月に、岡崎高等師範学校附属中学校が豊川市に開設された。2学級編成である。24年6月には名古屋大学岡崎高等師範学校附属となった。
- (イ) 25年4月に、名古屋大学岡崎高等師範学校附属高等学校が豊川市に開設された。附中は22年度から開設されているが、中学と高校は別個の組織であった。
- (ウ) 27年度から、名古屋大学教育学部附属となり、教

新校舎における校風の展開

育学部教授が中・高共通の校長として発令されるようになった。中・高一体化の動きが出てきた時である。

- (㊦) 27年度から、移行措置をとりつつあった名古屋市への移転が始まり、28、29年度は豊川市と名古屋市に学校が2分された時期である。28年9月には、附中の教官が全員附高に併任されており、教官の組織の上では中・高一体化がなされたが、学校全体としては変則的なことが多い時期であった。
- (㊧) 東三河の豊川市から名古屋市へと、年度ごとに漸次移転を行ない、豊川の生徒は豊川で卒業させた。移転に伴って、生徒の気風、環境の一大転換が見られた。
- (㊨) 30年度から、中・高一体化した形で名古屋における授業が始められた。しかし、30年度は生徒募集の方法において、中学と高校の関連が見られないので教官組織は一体化していたが、中・高一貫教育が始まったとはいききれない。
- (㊩) 31年度から、附中出身者をほぼそのまま高校に進学させるようになり、32年4月には附高教官の附中併任が行われたので形式上も中・高一体になったといえる。
- (㊪) 名古屋市東区から千種区へ3回目の大移転（小移転を含めると5回目）が行われた。そのため、38年度は便宜上学校の位置が中・高の二つに分けられることになった。

表1の中の①～⑤の記号は、校舎の位置を示している。次の説明と参照図によって移転のあとを示しておく。

- ① 豊川市牛久保町奥代田の校舎
- ② 豊川市牛久保町中代田の校舎
- ③ 名古屋市東区東芳野町1の校舎
- ④ 名古屋市東区東芳野町2の校舎
- ⑤ 名古屋市千種区不老町、名大構内の新校舎

参照図

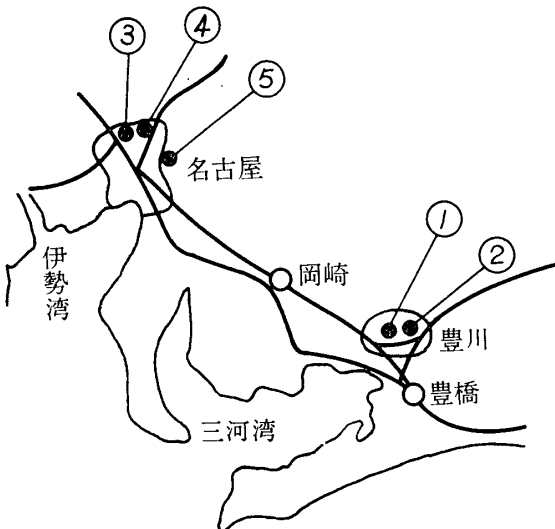


表1 本校の歩み

年度	中学			高校			校長(主事) (限元保)	(事務取扱い)高	(ア)
	1	2	3	1	2	3			
(22)									
(23)									
(24)									
25									(イ)
26				①			塩田芳久	秋元照夫	(ウ)
27							細谷俊夫	依田新	(エ)
28								近藤貞次	(オ)
29				③					(カ)
30									
31								仲	(キ)
32								新	
33						④			
34								広	
35								岡	
36								亮	
37								蔵	
38								大西誠一	(ク)
39						⑤		郎	

2. 入試方法の変遷と校風について

入試方法の変遷につれて学校の気風が大きく変化している状態についてまとめてみたい。この場合、社会状況の変動は考慮しないことにした。説明は、表2の中のグループ分けした類型(ア)～(ク)についてである。高校の気風の変化を中心に概観することにした。

- (ア) 附中とは無関係に学力選抜による入試を行ない、学校創設期にあたり、教官・生徒一体となった団結がみられた。
- (イ) 名古屋市への移転をひかえ、附中出身者のみから1学級を抽選入学させた。続く学年を持たない変則的なグループ。
- (ウ) 名古屋で募集されたが、定員の約半数しか入学しなかった。学年進行にともなって、学校の体裁がととのう過程にあるにもかかわらず特に目立つ気風も樹立されていない。
- (エ) 名古屋へ移転完了したところで、高校入学時に学力選抜入試方法を取り注目を集めた。この方法はこの回限りとなったので、個人的には優秀な生徒が集ったが学校全体の気風を高めえなかった。
- (オ) 中学入学時に抽選、高校へほぼそのまま進学する形がとられた。(エ)と次の(カ)の間になって沈滞した気風であった。
- (カ) 中学入学時に学力選抜し、そのまま高校へ進学す

る形であったから、優秀な生徒が多かったが、中・高6ヶ年通しの少人数対象の教育であるところから、環境に対する慣れと刺激の少なさが問題とされはじめた。

尙、33年度から金沢大付高との交歓試合を行うようになり、ついで(ウ)の頃盛んであったがその後行なわれていなかった対外試合も再開され、大きな刺激となった。

(イ) 中学入学時抽選、高校へほぼそのまま入学、中・高の定員差だけ外部中学から抽選を加味して入学させる方法に定まってきた。この(イ)のグループは異質な(ウ)のグループとの関係もあって、独自なまとまった気風を生み出したとはいえない。

(ウ) これより中学入学時抽選、高校へほぼそのまま進学という今の体制の生徒だけになっている。36年4月、12回生が高校に入学してからのことで、以来3年半になる。

こうした(ウ)の体制は高校の水準を低下させ、学力差の大きい100名たらずの生徒が6年間同じ環境の下にあるところからも問題が生じてきた。高校の気風の中学化であり、気まとも無気力とも受けとれるゆるみが見うけられることなどがそれであるが、この(ウ)の体制に即応する指導方法を見出すことは新しい試みといえるものであった。広岡前校長の下に学校ムードの

表2 入試方法の変遷

卒業(学年) 回生	中学入学(年)	高校卒業(年)	中学	高校	類型	備 考
高1	36	—	○	△	(ウ)	○は抽選による方法 ×は選抜による方法 △は附中出身者がおおむねそのまま入学する方法 □は名古屋移転にともなう独自な方法 空欄は中学における独自な方法 ●■は2学級編成のところ1学級分ないし定員に満たない数のものが入学したことを示す (中・高ともに1学年2学級編成)
高2	35	—	○	△		
高3	34	—	○	△		
12	33	39	○	△		
11	32	38	○	△	(イ)	
10	31	37	○	△		
9	30	36	×	△	(カ)	
8	29	35	○	△	(オ)	
7	28	34	●	△		
6	27	33	●	×	(エ)	
5	26	32		■	(ウ)	
4	25	31		■		
3	24	30	○	●	(イ)	これより上は名古屋市に於ける募集。 以下は豊川市で東三河からの募集。 は中・高が全く別な学校であったことを示す。
2	23	29		×	(カ)	
1	22	28		×		

改善を手がけるようになったのは、こうした状態の内面からの打開の方策であり、又、大西現校長の下に高校の学級増運動に期待をかけ、入試方法を検討しているのはこうした現状の外側からの打開の方策と考えられる。

こうした一連の流れから見て、本校の校風は新校舎における今後の教官と生徒の活動の間から生成されてゆくというのが妥当なところであろう。

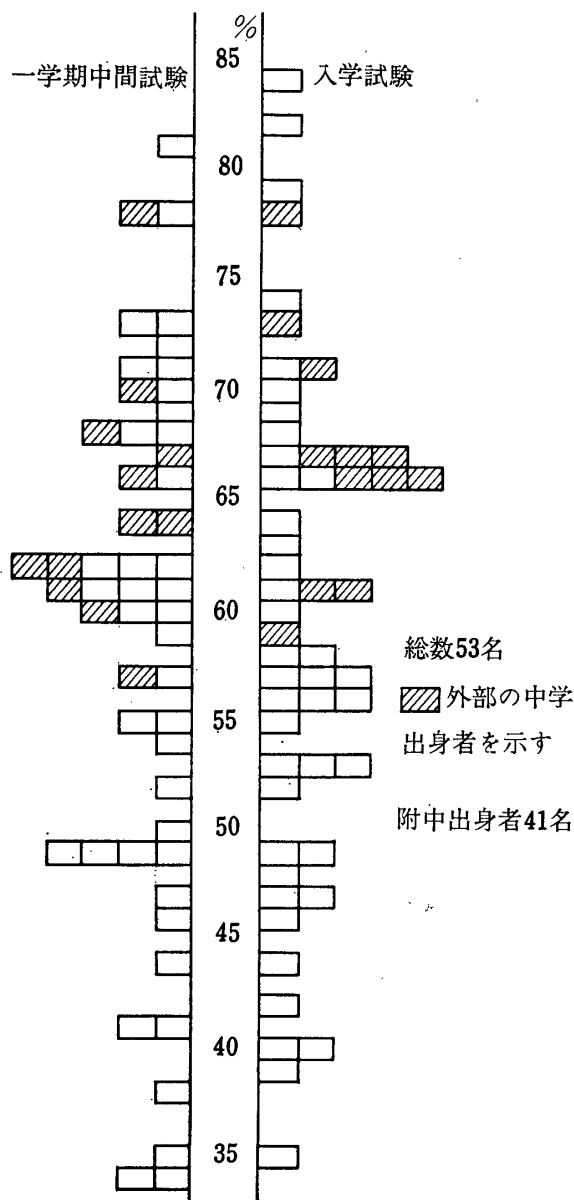
3. ホーム・ルーム指導の現状（実践例と問題点）

(1) ホーム・ルーム内の生徒の学力構成

附高のホーム・ルーム内の生徒の学力構成について、例を高1のB組にみよう。表3は高校入学試験の成績と1学期中間テストの素点の合計を%にしたものである。

大学区制をとっている名古屋市内の有名校に入りう

表3 高1の一つのクラス内の生徒の学力構成



るものから、下位高校程度までの生徒が1クラスを構成している、その大半が附中出身者であるところに特色がある。

(2) クラス編成と委員

クラスは年度ごとに組み換え、学力とクラスのリーダーが平均するようにし、クラス担任は原則として2年以上持ち上がりしないようにしている。クラスの中の生徒の委員は次のようにクラスの半数以上のものがこれにあっている。

室長1, 副室長1, 書記2, 会計2, H・R代表4
生活委員2, 文化委員2, 体育委員2, 図書委員2
放送委員2, 報導局員2, 厚生委員2, 学園誌委員2

(3) ホーム・ルームの時間配当と計画

ショート・タイムは火～金の4日間、昼休み後に5限が始まる前の10分を当てている。内容は、学校からの伝達、生徒会からの問題、担任の話などが多く計画的な利用はしていない。

(高校の調査例) ショートタイム・ホームルームはうまく活用していますか。

	1A	1B	2A	2B	3A	3B	計
きわめて有意義に活用している	1	1	1	1	2	1	7
うまく活用している方である	18	16	19	22	9	10	94
何とか利用している	17	19	20	9	19	16	100
あまりうまく活用していない	12	16	6	11	12	17	74
無意味やめた方がよい	5	1	6	5	5	8	30

ロング・タイムは木曜の6限(50分)をあてている。指導計画表は作成しつつある段階で、今のところは担任の自主的運営を中心としている。

(高校の調査例) ロングタイム・ホームルームはうまく活用していますか。

	1A	1B	2A	2B	3A	3B	計
うまく活用している	5	7	18	9	22	15	76
何とか活用している	21	20	17	17	22	25	122
あまりうまく活用していない	25	26	16	22	12	12	113
やめた方がよい	2	0	0	4	4	0	10

S・T, L・Tの他に月曜の朝に全校集会の朝礼(15分)があり、校長の話を中心に、指導部や生徒会からの伝達を行なっている。

(4) 担任とクラスの生徒とのつながり

クラス担任とクラスの生徒とのつながりは、どの程度のものか調査してみた。表4は広い範囲の選択肢をならべてつながりを調べようとしたもの、表5は先生

表4 進学や就職の問題が起きたとき、だれの意見を一番参考にしますか。

	担任の先生	担任以外の先生	父母兄弟など家族	友人先輩	わからない
3年	30	4	44	11	11
2年	22	5	47	7	19
1年	17	1	33		44
平均	23	3	41	8	25

に限定した選択肢によって選ばせた結果である。表4の進学就職問題については、学年が進行するにつれて担任に依存する度合いがふえている。表5は、学年によるよりもクラスによる差が大きかったが、個人的なクラス担任と生徒の結びつきの多いことと、クラスのまとまりの間には、次に示すように、一定の関係はなかった。

クラスの符号(順不同)		ア	イ	ウ	エ	オ	カ
相談相手(表5の実)	担任の先生	23	22	17	15	14	13
	相談係(カウンセラー)と担任以外の先生	12	9	17	14	7	17
	先生になってもらわれない	4	7	2	8	14	2
	わからない	13	15	14	15	13	19
クとまのま	よい, まあよい方	11	19	11	20	23	17
	普通	16	17	19	20	9	19
	ややわるい, わるい	25	17	17	12	16	17

(5) 本校の生徒について

ホーム・ルーム指導につながる問題として、本校生徒の内面的姿勢の概要を、調査の結果から拾い上げてみたい。

(質問) 尊敬している人物の名前を書いて下さい。

	1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	計
有として名前を書いたもの	17	29	10	15	6	22	99
無としたもの	36	24	41	37	47	30	215

表5 個人的な問題が起きたとき、相談したり指導してもらおう先生を1人決めることにしたらどうしますか。

	担任の先生になってもらわれない	相談係(カウンセラー)の先生	担任以外の先生	先生になってもらわれない	わからない
3年	39	10	19	6	26
2年	29	6	15	22	28
1年	32	10	15	10	33
平均	33	9	16	13	29

(質問) 1学期の間に病気以外の原因で遅刻したことがありますか。

	1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	計
無遅刻	40	41	33	25	25	27	190
1, 2回あり	13	12	19	18	31	25	118
回数あり	0	0	0	8	3	0	11

(質問) 掃除当番になったとき、率先して掃除に当りますか。

	1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	計
率先して掃除する	19	16	27	18	26	20	126
率先してはしない	32	35	25	34	24	32	182

(質問) クラブ活動の参加状況について、どれに当りますか

	1 A	1 B	2 A	2 B	3 A	3 B	計
興味を持って自発的に参加している	41	40	40	39	9	10	179
あまり興味を持たず消極的に参加するだけ	8	9	6	5	0	0	28
ときどき顔を出す程度	4	0	6	6	20	16	52
クラブに加入していない(3年のみ)	—	—	—	—	24	26	50

以上、高校における調査結果から見て、理想像を追求する迫力に欠ける一面、クラブ活動のような同好的グループ活動には積極的であり、全般的に躰が身につけていそうでありながら、学年進行に伴って規律に対する構えがややくずれ始める傾向をみせる姿が浮び上ってくる。

(6) 高1の林間学校の指導について

(計画)

8月3日 朝、名古屋駅を出発、13.00分駒ヶ根市の宿舎着。散歩、地形説明、登山の注意等を行う。

4日 4.00分宿舎を出発、木曾駒ヶ岳に登山する。

新校舎における校風の展開

女子1名落伍の外は全員登山。山荘泊。

5日 3.55分山荘出発。頂上に向い峻線へ全員登る。天候悪化のため下山し始め、麓の宿舎に夕方帰着。

6日 昼食をはんごう炊さんの形で、グループごとに行う。夕方よりキャンプ・ファイヤーと試胆会を行う。

7日 朝食をハンゴウ炊さんの形で行った後、附近の名所を見学。午後、宿舎を出発して名古屋に帰り解散する。

(事前指導)

生活班のグループ分けを、担任の方で機械的に行う。

7月18日の午前中の4時間を使い、登山コース、山の地理、登山注意、行動上の注意を行ない、午後はグループ別に相談を行なわせた。

8月1日に全般的なことについての注意をした。

(林間学校における生活目標)

1. 不言実行を旨とし、進んで克己、奉仕、協力の態度をとらせる。
2. 困苦欠乏に耐え、質素、規律、責任の精神を養わせる。
3. 周到な準備、的確な判断、確固とした秩序を重んじさせる。
4. 大自然の壮麗、勇大さに感激し、若人らしい遠大な理想と自信を持たせる。

以上の4点を生活の指導目標にし、学校生活と異った場面において、団体生活の中から規律ある生活と学校生活の基盤になるホーム・ルームのまとまりを見つけ出させようとしたのである。付き添いの教官は担任2名を含めて計8名。持ち物、服装は華美にわたらないよう指導した。

(指導上特に留意した点)

時間を守ること。このため、8月3日の名古屋駅の集合時に遅刻した生徒2名を家に帰した。

団体として行動すること。グループの班長が責任を持って、グループをまとめ、又グループ員は協力するよう指導した。登山にあたっては、全員が登山できるようペースを考えた。

(指導の結果)

4泊5日の林間学校で身に付いたり、得たりしたことを調査してみた。

		男	女	計
(ア)	団体生活、行動というものがわかった	6	4	10
	友達よき、友達の新しい面を知った	4	4	8
	時間を守ることの大切さを知った	2	2	4
(イ)	登山の仕方やはんごう炊事の方法を知った	10	6	16

	自然の美しさにうたれた	3	4	7
(ウ)	早起きなど規律正しい生活のよさを味わった	5	3	8
	家のありがたさがわかった	2	1	3
	忍耐すること、不屈の精神をもつことを知った	10	7	17
	歩くことに自信を持った	1	2	3
	批判する力を身につけた	1	1	2
(エ)	特別にない(人数を示す)	20	8	28

(ウ)は団体生活から身につけた事柄を示し、総計22。この期間を通じて、新しい友を見つけた生徒は男4名女2名。この結果から見ると団体生活を意識する度合いが教師の期待するほど高くないことがわかる。

(イ)は自然の美や登山技術についての事柄を知ったもの、総計23。

(ウ)は個人的な知識や心の持ち方を身につけたもの、総計33。

(エ)はなしとするもの、28。

次に、この林間学校でよくないと感じ改善したく思うことを調査した。無とするものは男18名、女17名、約35%であった。改善したいと思う点は次の通りである。

日課の組み方、日程の取り方等計画に関すること。計27。

	男	女	計
日程、日課をもう少し工夫してほしい	6	5	11
試胆会は不要	6	5	11
持ち物をもう少しはっきりしてほしい	1	3	4
林間学校の目標をはっきりさせてほしい	1	0	1

生徒が見た生徒の行動に関すること、及び先生に対する要望。計23。

	男	女	計
旅の恥はかきすて的で、登山道徳に反しているものがいた	6	2	8
他のグループと無交渉であった	0	1	1
個人行動をとり、迷惑をかけるものがいた	2	6	8
先生と話す機会が少なかった	3	0	3
先生の態度で気になることがあった	3	0	3

生活指導に対する疑問を表明し、改善を期待するもの。計25。

	男	女	計
遅刻者2名を家に帰さなくてもよいと思う	7	1	8
食事を残さず食べさせたが少し無理	2	4	6

寝る前の点呼を考え直してほしい	5	1	6
もう少し計画的にしてほしい	5	0	5

(まとめ)

ホーム・ルームを中心とした指導の一例を上げたのであるが、この場合、登山という新鮮な目標があった

のでまとまりのよい指導ができたように思う。しかし平常のホーム・ルーム指導においては、こうした魅力ある新鮮な目標をたやすく用意できないところに、今後考えてみなければならない種々の課題があるように思う。

(酒井為久 記)